

第 I 章 基本的な考え方

1. 研究主題の意味と重要性

人間らしさ、人間存在の特徴のひとつとして、——「ことば」を使って生活する——ことが言われている。人間が成長していく過程に即応し（その程度の違いは多少あるものの）「ことば」も、初歩的な段階（喃語、きわめて具体的な名付）から、やがては「ことば」を使って抽象的な思考活動を行うまでに高まってくる。

このように、人間の発達にあわせて、「ことば」はさまざまな様相を示し、各発達段階での活動を支えている。その中で、一貫していえることは生活を合理的に、快適に、豊かにし、ひいてはたくましさや育てていく媒介物として、人間らしさを支える基本的なものであるということである。つまり、「ことば」は人間のもつ諸機能のなかの中核的なものであり、「ことば」をもつことによって人間の世界は著しく広がりや深まりをもつことができるといえる。

「ことば」の機能面を具体的にとらえてみると次のようになろう。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">① 人と人との意志の伝達の手段である。② 科学的にものごとを思考し、理解し、推理、創造する道具である。③ ものごとを判断したり、行動を規制して社会生活に適応する道具である。④ 経験の量を増し、生活をより豊かにする手段である。 |
|---|

このような機能をもつ「ことば」は生得的なものではなく、また自然に獲得されるものでもない。学習によってのみひとりひとりに身につけていくものである。ここに指導の可能性があるといえよう。

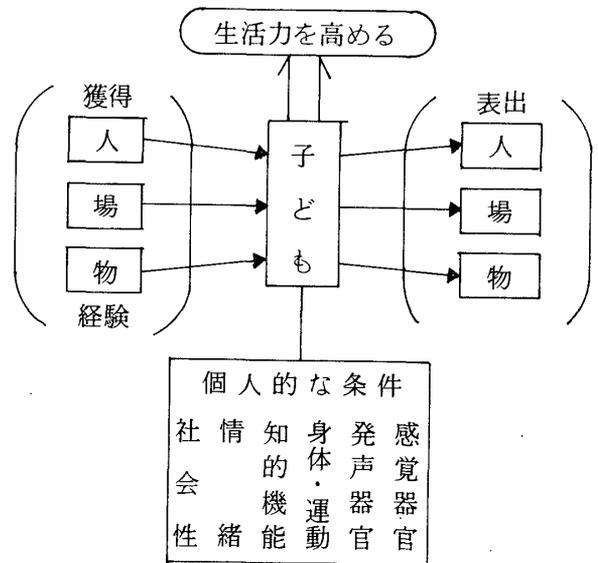
生活の中で「ことば」の占めるウエイトははかりしれないほど大きく、ことばをしゃべれなかった子が、たとえ一語文、二語文であろうとしゃべれるようになれば、彼の生活は飛躍的に拡大し、体験量の豊富さが生活処理への自信につながっていくことは容易に想像される。人間として生活をしていくうえで、こうした力を身につけていくことは必要不可欠であるということが出来るが、それゆえに私たちはひとりひとりの能力に応じてそれにこたえてやらなくてはならない。この時、より大切にしていかなければならないことは、子ども自身、具体的、実際の場面で課題を処理するために今もっている「ことば」の力をせいっぱい使っていることであり、さらに、この力を伸ばしたいと訴えてくるという事実である。

こうしたことを基本において、ひとりひとりの子どもの「ことば」を豊かにしようと考え、表題のような研究主題を設定した。

2. ことばを育てる「人」「物」「場」

学校生活の中で子どもたちの言語生活を観察してみると、そこには、子どもたちの言語活動を活発にさせる条件が見いだされる。そのひとつが子どもの周囲の「人」の存在である。その「人」が子どもたちにとって親和的な存在であれば、言語獲得のための望ましいモデルとなり、言語表出に意欲を持たず対象となる。次に、給食や遊びなどの「場」が考えられる。この「場」は、自己体験を豊富に与えることができれば言語獲得の場となり、快適な雰囲気やそなえていけば、有

効な言語表出の場となる。最後に、電話や遊具などの具体的な「物」がある。この「物」についても、自分で操作したり、身体で感じたりすることにより、子どもは言語を獲得していく。また「物」は自己のイメージを言語化する媒体や、話す意欲を引き出す道具として、言語表出に働いている。これらのことを構造的にあらわしたのが右の図である。



3. ことば（国語科）の目標の設定

養護学校（精神薄弱）の学校指導要領及び、小学校学習指導要領の国語科の目標を参考にして、本学級の国語科の目標を次のように設定した。

- 聞くこと、話すことへの意欲を高め、自信をもたせるとともに人の話を正しく聞いたり、自分の意見をはっきりと表現する態度や能力を養う。
- 読むこと、書くことに興味をもたせ、簡単な語句や文を読んだり書いたりできるようにする。

子どもたちの生活を豊かにすることと、ことばを豊かにすることとは表裏一体である。ことばを豊かにしていくためには、まず、ことばのもつ機能を知り、積極的にことばを使うようにならなければならない。そこで、「聞くこと、話すことへの意欲を高める」ための手だてを私たちは講じていく必要がある。

さらに、こうした活動に「自信をもたせる」ことによって、子どもたちはことばの利用に慣れ、伝達の手段としてのことばの意味を理解し、「人の話を正しく聞いたり」、聞く人の立場になって、相手にわかりやすく「自分の意見をはっきりと表現する態度や能力」がそなわってくるのである。

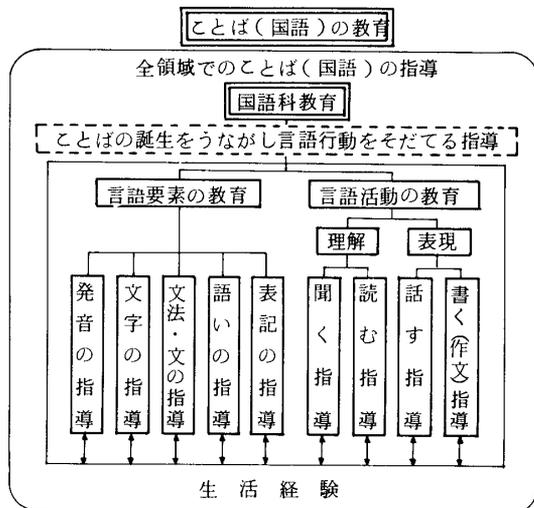
文字を読むこと、書くことについても、生活に直結したところで、という基本的立場に立って、まず、こうした活動に「興味をもたせる」ことから始めていく。「簡単な語句や文を読んだり書いたりできる」ためにも、ある程度、ドリル的な指導が必要となろう。しかし、その場合にも必ず生活に帰してやる手だて、学習したことを生活の中で使う場を構成してやる必要がある。

4. 国語科教育の構造

子どもたちのことばの獲得や改善、定着は、人間関係を前提として成立つ。即ち、ことばを獲得させていくためには、ことばそのものを指導していくことからでなく、集団生活に参加させることから始めていく。これは国語科の時間に限らず、全教育活動で考えていかねばならない。これが次ページに示す構造図の破線部分である。

こうしたことばの誕生を促し、言語行動を育てる指導としては、子ども自身には身の自立や身体、運動機能の向上、情緒の安定等を図ってやり、環境的には集団生活を通してさまざまな生活経験をさせ、生活空間の拡大を図ってやるのが大切である。人間関係のなかで、子どもの内的な発達と生活空間の拡大を全教育活動で補償してやるのが、とりわけことばの獲得期においては重視されねばならない。

国語科では、こうした経験活動とでもいうべき活動を学習の中にとり込み、活動を促し、興味をおこさせ、ことばにふりかえさせていく指導が主となってくる。図で言えば、言語活動の教育



にあたる。この活動がより確かなものになるために言語要素（事項）の教育を位置づけているが、この教育はことばの発達に遅れのみられる子の場合、それ自体が活動でもある。つまり、絵本を読ませる活動を進めていく中で文字の指導をするのではなく、文字を獲得しつつある時には生活と結びつけたところで文字そのものの指導を行っていく。こうした教育を言語要素（事項）の教育として考えている。この中には、幼児教育の言語（もしくはそれ以前のもの）に相当する内容のものも位置づけている。発達に遅れのみられる子の場合、このあたりの教育が重視されなければならない。

なお、個々の基本的指導事項については、指導内容表を参照されたい。

5. 指導内容の系統と段階

これまでに述べてきたことば（国語）の基本的指導事項を、言語要素（事項）と言語活動とに分け、さらに指導事項間の系統性に従って、Ⅰ～Ⅳの四つの段階に分けたのが次ページに示す「ことばの指導内容の系統と段階」の表である。表中、枠でくくったものが指導事項であり、その系統は実線で結んで示した。Ⅱ及びⅣ段階の破線枠の指導事項はとりたてて指導するのでなく配慮していくというものである。Ⅰ、Ⅱの段階で、言語要素（事項）と言語活動の領域間の境界線を取り除いたのは未分化な段階ととらえたからである。また、Ⅲ、Ⅳ段階での太い矢印は、一応二つの領域に分けられるものの極めて密接な関係にあることを示している。（段階Ⅰ～Ⅳは、めやすとしてMAの0～3、3～5、5～7、7～9歳に相当するものである）また、表の右半分の内容は系統表の段階に合わせて、ことばの教育内容を生活の中で扱っていく例を示したものである。これは、障害児のことばの指導は全教育活動の中で実際的な場面を通して獲得、改善、定着させていくという基本的な立場を示すものである。

6. ことばの指導での留意点

子どもたちのことばの獲得や改善、定着は、人間関係を前提として成り立つ。即ち、ことばを獲得させていくためには、ことばそのものを指導していくことからではなく、集団生活に参加させることから始めていく。これは国語科の時間に限らず、全教育活動の中で子どもをとらえていく必要を意味する。このことを基本にして、以下の点に留意することにした。

(1) 心身全体の成長・発達を目指す

ことばの遅れや障害の多くは心理的な面（情緒の不安定、全身的な発達の未熟など）や環境的な面（言語環境の問題など）など、いくつかの要因が重なり合っていることが多い。そのため、ことばの指導はできるだけ多面的に行うことが必要となる。子どもの心身の全体的な成長・発達を支える活動の中でこそ、言語は発達するという考えを大切にしたい。

(2) 人との暖かい情緒的な関係を育てる

ごっこ遊び、あるいは人間関係の中での遊びは、ことばの獲得に重要であるとされている。人との暖かい情緒的な関係はその子にとって快適な状況をつくりだす。そうした中で周囲の人をモデルにした言語模倣が多く行われるようになり、また相手に話しかける意欲も高まるため、言語の獲得は促される。ことばは暖かい豊かな人間関係の中でこそ育つと考える。

ことば（国語）の指導内容の系統と段階

領域	ことばの								
	ことば（国語科）の指導内容								
	言語要素		言語活動						
段階			理解	表現					
I	○ことばの誕生を促す言語行動を中心とした指導								
II	語いの指導(1)	<p>文字化以前の指導</p> <ul style="list-style-type: none"> 音の認識 音節分解 音節抽出 <p>実物, 絵の認識 図形の認識 図形の模写</p> <p>文字の指導(1)</p> <p>清音 濁音 半濁音</p>	発音の指導(1)	表記の指導(1)	文法の指導(1)	開く指導(1)	読む指導(1)	話す指導(1)	書く指導
III	語いの指導(2)	<p>文字の指導(2)</p> <p>促音 拗音 長音 拗長音</p> <p>文の読み書き以前の指導</p> <p>文意識 単語の読み書き</p> <p>文の読み書きの指導(1)</p> <p>文字の指導(3)</p> <p>基本文</p> <p>ローマ字(記号) カタカナ漢字</p>	発音の指導(2) <p>句点(。)(助詞「は、へ、を」)</p> <p>表記の指導(2)</p> <p>文法の指導(2)</p>	文法の指導(2) <p>表記の指導(2)</p> <p>発音の指導(2)</p>	文法の指導(2) <p>表記の指導(2)</p> <p>発音の指導(2)</p>	開く指導(2)	読む指導(2)	話す指導(2)	作文の指導(1)
IV	語いの指導(3)	<p>文字の指導(4)</p> <p>漢字, ローマ字</p> <p>文の読み書きの指導(2)</p> <p>変形文(単文)</p>	文法の指導(3) <p>表記の指導(3)</p> <p>読点(、)(かぎ「」)改行, 送りがない</p> <p>発音の指導(3)</p>	文法の指導(3) <p>表記の指導(3)</p> <p>発音の指導(3)</p>	文法の指導(3) <p>表記の指導(3)</p> <p>発音の指導(3)</p>	開く指導(3)	読む指導(3)	話す指導(3)	作文の指導(2)

指 導 内 容

全領域・生活経験でのことばの指導内容

聞 く	話 す	読 む	書 く
<ul style="list-style-type: none"> ○「ダメ」という禁止に応じる。 ○動作を示す簡単な指示を聞いて行動する。 ○簡単な質問に答える。 ○依頼された簡単な指示を聞いて行動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分のしたいことを意志表示する。 ○名前を呼ばれたら返事をする。 ○簡単な依頼や訴えをする。 ○おはよう、さよならのあいさつをする。 ○きかれたことに返事をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○図形や絵等の違いがわかる。 ○自分の好きな絵本を楽しみながらみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○かぐり書きをする。 ○簡単な図形や略図をぬる。 ○直線や曲線を書く。
<ul style="list-style-type: none"> ○物語(お話)を静かに聞く(5分間程度) ○ものの名前を聞き、その事物を選ぶ。 ○注意を集中させて人の話を聞く。 ○校内放送の一部を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の名前をいう。 ○先生、学校、学級の名をいう。 ○家族構成をいう。 ○自分の年齢をいう。 ○自分の家の住所をだいたいいう。 ○自分の性別をいう。 ○曜日をいう。 ○身近な人と話しをする。 ○簡単なあいさつをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の名前(ひらかな)を読む。 ○友人の名前(ひらかな)を読む。 ○日常生活でみなれた簡単な看板や標識を読む。 ○乗りつけた乗り物の行先表示を見分ける 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の名前(ひらかな)を書く。 ○日付や曜日を視写する。 ○連絡帳などでみなれた簡単な漢字を視写する。
<ul style="list-style-type: none"> ○指示や説明を聞きとって行動できる。 ○集団の中でも簡単な話してあれば補足なしでわかる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学校から家庭への簡単な伝言をする。 ○電話のとりつきをする。 ○電話で簡単な伝言をする。 ○買物にいて、必要なことをいう。 ○自分の家の電話番号をいう。 ○何曜日かいう。 ○自分の住所をいう。 ○自分の生年月日をいう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○日常生活にしばしば使う、カタカナ、漢字を読む。 ○テレビ、ラジオの番組を読む(わかる) ○週時間表、日課表などを見て理解する。 ○絵本の字を意味の通じる程度に読む。 ○マンガの本を読む。 ○1年生程度の漢字を読む。 ○時計がだいたい読める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の名前を漢字で書く。 ○日常生活によく使う簡単な漢字(友人の名、学校名など)を書く。 ○日付や曜日を正しく書く ○自分の住所を漢字をまじえて書く。 ○漢字のあて名を視写する。 ○カタカナがだいたいかける。 ○日常生活において、しばしばふれる1年生程度の漢字を読む
<ul style="list-style-type: none"> ○簡単な放送の要点を聞きとる。 ○ニュースや天気予報を聞き生活に役立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○知っている道順を説明する。 ○場に応じて、礼やことわりの言葉を所う。 ○簡単な司会をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○公共施設や看板、掲示、案内板を読む。 ○時計、温度計を読む ○列車、バス等の時刻表や掲示がわかる。 ○2年生程度の漢字を読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の生活に関係の深い地名、場所などを漢字で書く。 ○自分の住所を漢字で書く。 ○自分の生活に必要ないろいろな書式の語句をだいたい書く。 ○必要に応じて、辞書を使い、正しい文字を調べて書く。 ○日常生活において、しばしばふれる2年生程度の漢字を書く。

(3) 周囲がよい話し手，よい聞き手になる

ことばの獲得は子どもが生理的にも心理的にも快の状態の時により良く促進される。そのためには親や教師（周囲の子ども）がその子の話に喜んで応じ，快く聞いてやる態度が必要となる。子どもの気持ちや言いたいことを正確にとらえ，相手になってやることは，子どもの発語意欲を高める。こちらから話しかける時には，その子が理解しやすいようにゆっくりと，そして表情豊かに語りかけることが最も大切となる。

(4) ことばを教えこもう，訓練しようとしな

ことばは学習により身につくものであるが，その獲得過程をみるとことばの訓練等によらず自然と身についていくようすがわかる。ことばは指導者側が教えこもうとしたり，教育熱心なあまりに何とかしようと身構えるほどうまくいかなることが多い。子どもが喜んで参加できる遊びの要素を多分に含んだ場面でこそ生きたことばが習得されると考える。

(5) 罰をもちこまない

発音が不明瞭であるからといって叱ったりするなどの罰を与えることは決してやってはならないと考える。強制的な訓練や罰はことばを使用する意欲を子どもから削ってしまうことが多い。ことばの獲得は子どもの内発的な興味・関心や好奇心に強く支えられており，そのための環境づくりが大切となる。